



令和5年度 第1回きこえとことばの基本研修会

テーマ 「聴覚障がい教育はじめの一步」

講師 福島県総合療育センター 言語聴覚士 山田 奈保子氏



5月10日(水)、第1回きこえとことばの基本研修会を開催しました。今回は、本校の子どもたちも大変お世話になっている福島県総合療育センター言語聴覚士の山田奈保子氏より「聴覚障がい教育はじめの一步」というテーマで、「きこえ」に関する基礎基本から最新情報まで貴重な講演をいただきました。

<最新情報として…>

- 認知症予防のリスクに難聴があげられている。対人コミュニケーションや社会的参加が重要である。
- 世界の12～35歳の若い世代の半数近い11億人が、難聴になるリスクがあり、スマートフォンなどの音は大きすぎぬよう注意をし、騒音性難聴を予防していくことが最重要である。
→安全な音のレベルは大人80dB,子ども75dBを1週間に最大40時間まで
- 難聴を生後6ヶ月までに発見することで、補聴器や人工内耳の早期装用、早期療育につながり、言語発達の遅れを軽減できるようになってきた。

<きこえのしくみときこえにくさ>

- 補聴器や人工内耳を装用したときのきこえについて、きこえの体験をしました。人工内耳の特徴として、音楽のリズムは取れるがメロディを取ることが苦手ということも、実際に聞かせていただいたことで理解が深まりました。
 - 10年前に行われた感覚器障害戦略研究の結果からわかったこととして、難聴児の60%の子どもが日本語がわからない状況で小学校へ通っているという事実や、語彙年齢が生活年齢よりも2年以上遅れている等、具体的な話を聞くことができました。
- 以上のことから、早期教育の大切さや人とかかわることの大切さをあらためて考えることができました。



<きこえにくさに対する対応>

- オーゾグラム(聴力検査結果)については、発音の指導に活かせる読み取り方についてお聞きすることができました。スピーチバナナ(会話音域)の中に補聴器の装用閾値が入っているかどうかで指導法が変わるため、オーゾグラムの確認が大切であることを学びました。
- 例)補聴器の装用効果から、/s/行の子音の聴取は難しい 等
- 自分が担当するお子さんの聴力検査の結果から、会話音域で重要な500・1000・2000Hzの装用閾値がどの程度なのかを読み取り、どのくらいの声の大きさが必要なのか、例えば聴力が30dBのお子さんであれば、聞こえ始めが30dBなので、確実に話し声を届けるには、70dB程度は必要であることなど、具体的な対応方法について学ぶことができました。



<参加者の感想>

- ・VTRを見て、早期教育、医療的な対応の大切さをよく理解することができました。
- ・補聴器を初めてつけました。すごく響きました。補聴器を外している生徒がいましたが、疲れることを実感しました。

